61 宇都宮宿～徳次郎宿

栃木県宇都宮市

野 沢 ～ 大杉屋

（ 歩行距離 1946m 25分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp

農場試験場入口信号

光明寺前の信号から右に入り、静桜と鏡ヶ池を見学した後、第一技研工業を通って来ると農儀容試験場前の信号にでる。

光明寺

⑦光明寺

文禄年間（1592～96）、野沢の石塚に玉塔院を建立したのに始まり、寛文11年（1671）にこの地に移された。

寛永年間（1624～1644）に家光が日光参詣をしたときに、お茶を設けたという御茶屋跡がある。また、寺の前には立場があったといわれている。

宝暦7年（1757）女人講が建てた宝篋印塔（ほうきょういんとう）には「…往来貴賤童男童女結一見一礼法…」と刻まれている。

十九夜塔は、如意輪観音の軸を掛け、その前で勤行（ごんぎょう）が行われる。般若心経、ご詠歌、和讃、真言などがあげられ、安産を祈り、死後のの血の池地獄から逃れる祈願をする。

coffee time

大谷石

大谷石は、約2000万年前の火山活動でできた緑色凝灰岩。軽石を含み、全体に緑色のかすり模様が入っているのが特徴です。石質は柔らかく加工しやすいため、建物や石垣など建築資材として利用されてきた。その歴史は古く、古墳時代後期の横穴式石室や、奈良時代の下野国分寺、国分尼寺建立にも使われ、近世では本多正純の宇都宮城改築の際にも大量の大谷石が使用された。現在でも、大谷石を使った建物がある。

静桜

⑤鏡ヶ池

民家の竹林の中に丸い神秘的な池がある。静御前がその池に鏡を落としてしまったという伝説がある。民家の中で、所在を確認できない。

④静桜（御前桜）

「野沢村往還より一町程引込、しつか桜と号（なづけ）候桜有レ之」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）「土人の伝へに、むかし源九郎義経の妾静女当所に来り、携るところの杖を立置しが生活して大樹となり、其花一枝に八重一重咲まじりて尋常の桜に異なり。むかしより両度ほど枯木となりしが、根本よりひこはへ生じて絶ることなし。此もとに塚二つあり。何人の印なるにや。もし穿つものあれば、必災ありといふ」「この里人、都にて静桜などいふ種をとり来りて植しものならむ」「もと名もなき木なりしが、やさしき名をつけて所のながめとせんとて。常の桜より花の遅く咲をもて静桜と名付けしを、年をふるにしたがひ種々の説を附会せしといふ」（日光道中略記）

民家の庭に生えている桜の木は11代目になるというあまり高くない木です。

一枝に八重と一重の桜が咲き年によっては細い花びらの入った兜のような珍しい花も咲くという。

奥州に落ち延びた義経を追う静御前が桜でできた杖をさしたら、桜の枝が繁り大木になったという伝説のほかに、通常の桜より遅く咲くために静桜と名づけられたという説もあります。

住宅街の細い道

③野沢村

「往古は民家往還より東にありしが、日光街道開けしより後、今のごとく往還の左右に移りしといふ」（日光道中略記）かつてはこの辺が集落の中心であり、二荒山への道もあった。

野沢の地名は、野原に釜川の水源があり、この沢が入り込んでいるというので名付けられた。

軽い上り坂

②庄屋中村家

郵便局の手前を右に入ると、かつて庄屋だった中山家がある。本陣として諸侯が小休止をした。正徳5年（1715）休泊料の資料が残っている。（非公開）

⑥野沢村の立場

「当村は宇都宮宿より徳次郎宿までの中間にして、憩息に便利なれば、いつとなく人足の立場となれり」（日光道中略記）

旧野沢村は幕府領で天保年間（1830～1844）には15軒の民家が街道の東にあった。宇都宮宿と徳次郎宿の中間にあり、休憩のための茶屋などが設けられた「立場」でした。野沢の立場は光明寺の前にあり床屋を務めた中山家には、正徳5年（1715）に諸侯が小休止したときに支払った休泊料の資料が残されています。

coffee time

日光杉並木街道

日光杉並木は、日光街道、日光例幣使街道、会津西街道のうち、旧日光神領内にあたる大沢から日光間16.52km、小倉～今市間13.17km、大桑～今市間5.72kmの3区間の両側に杉が植栽された並木道である。総延長は35.41kmに及び、世界最長の並木道としてギネスブックに登録されている。

徳川家康、秀忠、家光の三代に仕えた川越藩主松平正綱が、主君家康の没後、日光東照宮への参道にあたる3街道に約20年の歳月をかけて杉を植樹し、東照宮に寄進したことに始まり、江戸時代には幕府の日光奉行の元で手厚く保護された。

明治以降は幾度も伐採の危機に瀕するものの、官民双方の有識者の努力によって大規模な伐採は避けられてきた。中でも、地元出身の林学者で「杉博士」と呼ばれた鈴木丙馬は、杉並木の研究と保護に生涯を捧げ、保護運動の中心となって活躍した。

周辺の開発によって旧態を失った箇所もあるものの、植樹から400年近く経った現在でも約12,500本の杉が生い茂り、寄進碑や一里塚も現存するなど、江戸時代の街道の景観をよく伝えており、歴史的にも植物学的にも特に重要とされ、日光杉並木街道 附（つけたり） 並木寄進碑として、全国で唯一特別史跡および特別天然記念物の二重指定を受けている。

現在も生活道路として利用されているが、街道を通る自動車の排気ガスや沿線の開発による根の切断などによって樹勢の衰えが進行し、毎年平均して100本以上のスギが倒木や枯死により姿を消している。保護が叫ばれて久しいものの、減少のペースに歯止めを掛けるには至っていない。このままでは100年後には消滅してしまうとも言われ、早急な対策が必要とされている。

coffee time

源義経と静御前の悲恋

静御前は平安時代末期の白拍子（しらびょうし・歌や舞を演じる女性）で、源義経のに側室といわれている女性。

文治元年（1185）、兄頼朝によって京を追われた義経を助けたが、翌年、吉野山まで義経と別れたあと捕らえられ、鎌倉へ送られた。

その時に、生まれた子供を殺さてしまったという。この悲しい恋の物語が各地の伝説を生み、謡曲や歌舞伎の題材にも取り上げられている。

①釜川

釜川は、田川の支流で、宇都宮市を代表する延長7.3kmの小さな一級河川です。

水源の西弁天沼の細い流は、住宅街を抜け、弁天橋を通り、日光街道に沿って上戸祭、さらに宇都宮で田川に合流し、宇都宮の中心部を流れ宇都宮の人にとって馴染み深い川である。

弁天橋を過ぎる

弁天橋を過ぎるとファミリーマートがある。その先の交差点から右に森のような並木があるがすぐ途切れる。

足利銀行手前信号

足利銀行手前の信号でここで両側の並木がなくなる